

〔高嶋正晴先生を偲んで〕

高嶋先生を追悼して

立命館大学産業社会学部教授 景井 充

2019年7月4日。数年におよぶ難病との闘いの果てに、高嶋先生が亡くなられた。5月22日、ご自宅にお見舞いに伺った際、呼吸の苦しいのを押してテーブルについてくださった。高嶋先生はもうずいぶん発語が難しくなっていたから私が一方的に喋っていたが、学部の新しいセンターの旗揚げに刊行することを考えていた本への寄稿に変わらぬ意欲を示してくださっていた。この日が、高嶋先生との最後の日となった。

理不尽の思い堪えがたいものがある。親しい友人や知己を病で失うたびに、またもや病に攫われてしまったという憤りと無念がこみあげてくるが、高嶋先生を失ったことについては、なお一層その思いが強い。高嶋先生は、私にとって同僚であると同時に尊敬する師匠の一人でもあったからである。

高嶋先生が私たちの学部へ赴任されたのは2007年4月。2008年初めごろから右京区京北地域での活動に取り組み始めた私は、「国際産業論」を主担当科目とされていた高嶋先生が実は田舎暮らしをしていて日本の地方・地域の将来について深い関心を持っていらっしゃる聞き、今後の地域活動について種々教えを請いたいと思って声を掛けさせて頂いた。以降、何ほどのお返しもできないまま、ずっと同僚である以上に師匠であり続けて下さった。研究者・教育者としての要求水準を下げることなく、しかし先回りせず、押しつけもせず、求められればその人の器量に応じてアドバイスを惜しまないスタンスは、おそらく私に対してだけでなくすべての学生・院生に対して不変であったろうと思う。農山村の再生に向けて是非読むべき本は？との私の問いに、保母武彦氏の『日本の農山村をどう再生させるか』（岩波現代文庫）を推薦してくださった。この本を通して私は「内発的発展論」の世界に導かれ、戦後の国土開発政策の歴史と今後の農山村・中山間地域における地域開発のありかたに、日本近代の特質を掴むアングルのひとつとして深く関心を寄せるようになった。

高嶋先生と共同で、しかしもちろん大方私が教えを受ける形で取り組んだ活動として最も思い出深いのは、2011年度から4年間にわたって社会学研究科の「先進プロジェクト研究」において教育・研究プログラム化した、「中山間地域の社会的・経済的持続可能性に関する研究」である。大野晃著『山村環境社会学入門——現代山村の限界集落化と流域共同管理』など重要文献の精読、島根県の中山間地域研究センターへの視察訪問や丹波篠山地域での多様な取り組みについて現地を訪ねることから始まった。この4年間、重要な文献を読んで知見を深め、関連学会に参加し、農水省にヒヤリングに出かけ、丹波エリアで活動するいくつかの大学の現地スタジオを訪ね、四万十川の上流にまで足を運んだ。そして仕上げのように、2014年と2015年の2回、「フロンティア・デザイン・フォーラム」と題するイベントを東京キャンパスで開催した（「フロンティア・デザイン・フォーラム——『クリエイティブ・ローカル』の時代を拓く」高嶋正晴、景井充、中西典子、藤本美貴、宮内達朗、山田大地、塩見直紀、立命館産業社会学部論集、50(2) 163-180, 2014年9月）。さまざまの“課題”の山積が語られる地方・地域こそが次世代にとって新たなフロンティアとなり得るのではないかという

問題意識に基づいていた。この4年間、よく学び、そしてよく旅をした。得たものの大きさは計り知れず、私の筆力を遥かに超える。そういえばこの間、東北の被災地へも一緒に出掛けた（「『東北被災地大学調査』報告 景井充, 高嶋正晴, 坂田謙司, 山田大地, 立命館産業社会論集, 48(4) 159-171, 2013年3月）。

京北に関わる活動について、切り口を変えながら何度も取り上げて下さった（「第8章 大学の地域連携プロジェクトにみる農山村地域の魅力づくりとシニア活用」三宅康成, 内平隆之, 高嶋正晴, 中塚雅也, 松永桂子, 井原友建, 杉山武志, 公益財団法人ひょうご震災記念 21世紀研究機構 研究調査本部『研究調査平成26年度末報告書：人口減少下の多自然地域の魅力づくりの研究——シニア世代を活用した新たなビジネスの展開——』, 60-64, 2015年3月, 「第8章 大学の地域連携プロジェクトにみる多自然地域の魅力づくりとシニア活用——地域（ローカル）共通価値の創出（CSV）とプレミアム世代の活躍に向けて——」, 三宅康成, 内平隆之, 高嶋正晴, 中塚雅也, 松永桂子, 井原友建, 公益財団法人ひょうご震災記念 21世紀研究機構 研究調査本部『研究調査平成27年度末報告書：人口減少下の多自然地域の魅力づくりの研究——シニア世代を活用した新たなビジネスの展開——』, 79-89, 2016年3月, 「第13章 大学発の地域産品開発とネットワーク——立命館大学“京北プロジェクト”を事例として——」高嶋正晴, 中塚雅也編『地域固有性の発言による農業・農村の創造』筑波書房, 161-172, 2018年3月）。他方で、自らも「リッツ・ファーム」と称して京北でゼミ活動に取り組まれた。こうした一連の原稿化や実地の実践を踏まえて高嶋先生は、「景井先生自身による活動の意義づけや総括がなされるといいですね」と要望を語ってくださった。京北での活動はソーシャル・イノベーションの実践に向けて走り出そうとしているが、高嶋先生から頂いた“宿題”に、いずれ必ず応えなければならない、と思っている。

高嶋先生との思い出を記した。一緒に原稿も書かせてもらった。学部改革と連動した新センターの構想を深めるために、欧米圏でトップクラスの評価を受けているデンマークのビジネススクール「カオス・パイロット」に一緒に出掛けた。連れて行ってもらったと言うべきだろう（ちなみに「カオス・パイロット」の日本人初の学生は産業社会学部のOG）。「ソーシャル・デザイン」「ソーシャル・イノベーション」というテーマを産業社会学部に導入することについて確信を得られた旅だった。まだまだもっと多くの思い出を作りたいと思った、思う。まだまだ、一緒に仕事をし、勉強をし、旅をし、研究者としてそして市民としての見識を深めたい。高嶋先生は何といってもまだ若かった。そして産業社会学部の中核として学部の皆が期待していた。冒頭に記したお見舞いの際にも、高嶋先生はソファに座って厚い専門書を読んでおられた。グラムシ研究をはじめ、まだまだ研究を深めたいテーマがたくさんあったらと思う。教育活動に対しても最後の最後まで意欲を失ってはおられなかった。ゼミ生たちが寄せる信頼と敬慕の様子は、ゲストスピーカーと呼ばれた際にひしひしと感じたが、それはそれは羨ましいという以外にはなかった。冷静で、常に穏やかで、そして意義ありと見るや実に深い積極的批判の矢を放って新しい視野を拓いて皆を喜ばせていた高嶋先生。

あらんかぎりの感謝の念をお伝えし、いずれ必ず“宿題”を果たすことをお約束して、深く深く、衷心からご冥福を祈ります。

〔高嶋正晴先生を偲んで〕

高嶋正晴先生との思い出

立命館大学産業社会学部教授 櫻井 純理

高嶋先生との出会いは、1993年の春、立命館大学大学院国際関係研究科の修士課程に入学してしばらくのことです。当時の同研究科には様々な大学出身の優秀な院生が在籍しており、しのぎを削って研究に打ち込む雰囲気は溢れていました。そこで高嶋先生はバリバリ研究して激しく議論する「トップ層」グループの一人でした。一方私は、入学した当時はまだ社会人で、ゆるゆると大学院生活を楽しんでいましたので、彼のよ様な優秀な院生さんは「近寄りやすい」人と感じていたように思います。

彼との距離が縮まったのは、その年の秋学期から、同研究科のDMDP生としてワシントンDCのアメリカン大学(AU)大学院に留学して以降のことです。とはいえ、留学先でも彼は国際政治経済学、私は国際コミュニケーション論の専攻で、同じ授業を受けることはなく、付き合いはほとんど休日の息抜きばかりでした。当時私のパートナーだった櫻井公人氏(現・立教大学)の運転で他の日本人留学生も一緒に出掛け、郊外のアウトレットで洋服を買いこんだり、ジョージタウンのベトナム料理屋に行ったりしました。

日本に戻り、博士課程は別の研究科になりましたが、その後も友達付き合いは続きました。彼は小説や音楽にも造詣が深く、お薦めの本やメルマガや面白いサイトをよく教えてくれました。「純理さん、〇〇はもう読みましたか?」と連絡が来るので、「これは読まねば!」と一生懸命読んだりもしたものです。それにしても今思えば、彼に教えられ、影響を受けたことばかりが多く、その逆はほとんどなかったのではないかと思います。

研究に関わる面では、翻訳の仕事で何度かご一緒させてもらっています。スーザン・ストレンジ『マッド・マネー』と、マンフレッド・B・スティーガー『グローバリゼーション』(いずれも岩波書店)では、数章ずつ翻訳を分担し、櫻井公人氏と私たちの共訳書として出版させていただきました。高嶋先生の仕事はとても丁寧で、たとえば後者の本では、グローバリゼーションの歴史に関わる記述内容に関して、様々な文献を調べ検討しておられたことを記憶しています。また、巻末に付された日本の読者のための文献リストについても、高嶋先生の貢献度は非常に高く、幅広い分野の文献を挙げていただきました。

『グローバリゼーション』の原著は2017年に第4版が出版されています。この訳書は産業社会学部のプロジェクトスタディの授業でも使われているのですが、内容が古くなっていることから、高嶋先生は訳書のアップデートを検討したいと考えておられました。同年7月には彼から訳者一同に宛てて、「意見を聞かせてほしい」というメールが届いていました。しかしその後、話は止まったままになっています。2019年5月に彼から届いた携帯メールには、「今Stegerさんの『globalization』を読んだり、研究計画に沿った研究をしたりしています。なお、うちのカミさんも、メッシよりも、ビンラディンの方がじっくりくるようです」と記されていました。実は、第4版では第3版までのオサマ・ビンラディンの事例がサッカーのメッシ選手の話に変更さ

れています。家でもそんな会話をされていたんだなあ、微笑ましく思うと同時に、翻訳アップデートの話が進んでいないことが心に引っかかりました。

彼と最後に話したのは2019年5月23日のことです。来年度のゼミの募集や運営に関わる課題を中心に、どんなサポートをしていけばよいのかを検討していこうと考えており、まずは彼の要望を聞かせてもらおうと思ったのです。あの日、彼は笑顔でした。今でもハッキリと覚えていることがあります。うまく、また詳しくは書けないのですが、話の最後のほうで「～～でしょう？」と私が同意を求めたことに対して、彼は否定を言葉にはせず、ニヤッと笑って首をかしげました。ちょっと皮肉めいた笑顔を浮かべて軽く否定した姿は、昔ながらのタカシマでした。

自分にとって親友と呼べる人の1人が高嶋先生でした。同僚になっていなければ、昔のように、他愛のない世間話でもしながら、一緒に酒を飲む機会がもっとあったかもしれません。でも、高嶋先生が同僚でいてくれたことで、私はとても心強く、本当に迷い悩んだときには、彼の率直な意見を仰ごうと、心のどこかですっと頼りに感じていました。そんな気持ちを直接伝えることもできなくなってしまい、残念でなりません。いつかまた、そちらでたくさん話をしましょう。どうぞ安らかにお休みください。心よりご冥福をお祈りします。

〔高嶋正晴先生を偲んで〕

哀悼：高嶋正晴先生

立命館大学名誉教授（元 法学部） 中谷 義和

「人生、別離^{おお}足し」とはいえ、若い研究者との別れには悲痛感を覚えざるを得ない。

高嶋先生に初めてお会いしたのは何時かとなると定かな記憶にはない。ただ、20年ほど前にオナフ教授（Nicholas G. Onuf, 現フロリダ国際大学名誉教授）を囲む研究会があり、恐らくは、その席であったのではないかと思う。オナフ教授は国際政治の「構成主義」派の先駆者であり、高嶋先生は同教授の指導をアメリカン大学でお受けになったと仄聞している。そんな間柄もあって、オナフ教授が立命館大学に来校中の研究会で、その司会をお務めなさったのではないかと思われる。オナフ報告の言葉と高論は難解であったが、高嶋先生は司会者を務めつつ、適言をもって解説なさったことに印象を深くしたことを憶えている。

高嶋先生とは所属学部を異にしていることもあって、親交を繁くしたわけではなかったが、本学「人文科学研究所」のプロジェクト・チームでは課題を同じくしている。このチームは「グローバル化」という現代的テーマを中心としていて、高嶋先生は研究所の叢書第19輯に「グローバル市民社会と世界秩序：ネオ・グラムシアン・アプローチからの一検討」と題する論文を寄稿なさっている（篠田・西口・松下編『グローバル化とリージョナリズム』御茶の水書房、2009年、所収）。本論稿は、ネオ・グラムシ派の諸成果を踏まえて「グローバル市民社会」の有意性について検討するものとなっているが、高嶋先生の社会分析の視点のひとつがグラムシを介するものであっただけに、“グローバル市民”像の提示という点で興味深く拝読している。また、「人文科学研究所」のチームの一員として、つれだって、中国「社会科学院」を訪問したことがある。これは2009年3月中旬のことであって、その折には余寒の残る「万里の長城」をともに登っている。だが、彼の足並みについてゆけず、途中で休みだし、彼の帰りを待って「長城」から下りた記憶がある。また、宿舎では研究課題などをめぐって歓談している。

私の研究課題のひとつが資本主義国家のイデオロギー分析であったこともあり、リベラリズムの“コーポレイト化”という点では関心を共有していた。というのも、リベラリズムは資本主義国家の基軸的イデオロギーであるだけに、資本主義の形態変化のなかでリベラリズムも変容せざるを得ないからである。この点で、高嶋先生は「第一次世界大戦期アメリカにおける産業動員体制」の構築を“手がかり”として「コーポレイト・リベラル国家の出現過程」の分析を学位論文となさっていたこともあり、折に触れ意見を交わし、示唆深い知見を得ている。

高嶋先生とは、D. アーキブージ（Archibugi, イタリア国立研究評議会教授）の『グローバル化時代の市民像：コスモポリタン民主政へ向けて』（2010年、法律文化社）を共訳している。同教授を産業社会学部が招聘した折には昼食を共にし、「コスモポリタン民主政」をめぐって意見を交換している。他に、私との共訳書として次が残されている。(1) D. ヘルド編『グローバル化とは何か：政治・経済』（法律文化社）、(2) ヘルドとアーキブージ編『グローバル化をどうとらえるか：ガヴァナンスの新地平』（2004年、法律文化社）、(3) B. ジ

ェソップ『国家：過去，現在，未来』（2018年，御茶の水書房）。

高嶋先生がこの一連の翻訳作業に取り組まれたのは，先生の知的関心にそうものがあつたからではないかと思われる。その訳文は業績を反映し適確であつただけでなく，語学力の高さを示すものともなつている。とりわけ，最後の共訳書となつたジェソップの著書の訳出は御病身を押し立てたことではなかつたかと思われる。配慮を欠いたのではないかと悔やんでいる。

高嶋先生との交流は，上記のように，主として研究を介するものではあつたが，多くの思い出を残して下さつた。とりわけ，折々に覚える実直な人柄に印象を強くすることが多かつた。まことに有望な惜しい研究者を失うことになつたと思う。ここに，高嶋先生を追悼し，慎んでご冥福を祈ります（2019年11月8日）。

〔高嶋正晴先生を偲んで〕

高嶋正晴先生を偲んで

立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員 藤本 ヨシタカ

高嶋正晴先生には、私が博士後期課程に進学してからこれまでの約10年間、さまざまな場面でお世話になった。授業のTAをはじめ、京北地域での活動では大豆・納豆づくりと一緒に汗を流し、大学院の共同研究では鳥根、高知、綾部市、そして丹波市を訪問し、地域おこしの取り組みを間近で学ばせていただいた。最近では、中谷義和先生が中心となった共同翻訳にも誘っていただいた。

先生と初めてお会いしたときのことを今でもよく覚えている。後期課程に進学したての4月、コア科目のTAの件でお尋ねしたいことがあり、私は講師控室へ向かっていた。するとその途中、以学館の入り口で偶然先生をお見かけしたので、思い切って「高嶋先生ですか？」と声をかけた。先生は「どこかでお会いしましたかね……？」と戸惑われた様子で、私は慌てて事情を説明した。そんな失礼極まりない私にも、温厚な語り口で、懇切丁寧に対応していただいたことを今でもはっきりと覚えている。

「学部は心理学専攻で、大学院ではアメリカの産業史を研究し、今では中山間地域の活性化について関心を持っています。知り合いからは、“次はどこに向かおうとしているの？”と、よく冷やかされます」——とある授業の冒頭、先生は少し恥ずかしそうに自己紹介でこうおっしゃった。不思議な経歴をお持ちだなあと思いつつも、一つの領域に取まらない先生の柔軟さ、そして大胆さに魅かれた。後年、「もう大学院でやられていた研究はされないのですか？」とたずねると、先生は、「あのときの資料は全部段ボールの奥にしまっちゃったよ。当時は資料を集めるのが大変で、その割に成果としてまとめるのが難しくてね」と笑顔でおっしゃった。実際に当時書かれた論文を拝見すると、相当な密度の濃さに改めて驚かされる。一方で、アントニオ・グラムシの研究は、大学院のとき以来ライフワークとして続けてこられたようである。あちこちを飛び回る多忙な日々の中で、腰を据えてグラムシの原書に向き合う時間は、先生にとって何ものにも代えがたい貴重な時間だったという。

京北プロジェクトをはじめとする中山間地域での研究活動では、先生は主に「産学連携」、もしくは「産学民地」のネットワーク形成のあり方に関心をお持ちだったように思う。そしてそれが地域経済の発展・維持にいかんにかに寄与するべきか、私たちもさまざまな事例や文献をたよりに考えを巡らせていた。と同時に、先生はしきりに「人材」（「人財」という表現を用いられることもあった）の育成・確保の重要性を強調されていた。とりわけ、実践活動を通じて大学が果たすべき人材育成のあり方に、可能性と課題の両方を感じられていたように思う。人がいないとなあ、育たないとあ、と、先生は何度か口にされていた。

京北では、全身青色のつなぎを着て農作業をする先生の姿がおなじみとなった。手慣れた手つきで、黙々と作業に打ち込む先生が印象的だった。ある年、前年までとは比較にならないほど広大な農地をお借りし、そこで大豆を育てることとなった。雪のちらつく12月下旬、先生を含むわずか5人で収穫作業に挑んだ。さすがの先生もバテバテのご様子で、最年少の院生・Y君のハツラツとした姿を見て、思わず「いやあ、若いね

え」と一言。先生がしきりに強調されていたように、人がいないことの大変さ、深刻さをしみじみ実感した一日でもあった。

どの地域であっても、そこに住む人、その文化、そこで生み出されるモノやアイデアに、先生は深い愛情と敬意をもって接してこられたように思う。鳥根では、奥出雲の「たたら」製鉄所を訪れ、伝統技法の奥深さに触れた。高知では、美しい四万十川の流域で画期的な道の駅を運営されている方と出会い、経営理念と商品開発のアイデアに魅了された。綾部市では「綾部里山交流大学」を運営されている方々と出会い、「フロンティア・デザイン・フォーラム」と題した先進的なイベントを共同で開催した。そして先生がお住まいの丹波市では、無農薬のお茶の自園栽培・製造を手がける方々や、農業体験型レストランを運営されている方々らの熱い思いに触れた。豊富なネットワークと軽快なフットワークをお持ちであり、また誠実なお人柄の先生だからこそ、こうした魅力ある人々に出会うことができたのだと思う。

今年に入り、先生とご連絡をとる機会が増えた。以前から話はあったのだが、先生の個研を整理するアルバイトを依頼されたためである。5月から月に1度のペースで、今年度いっぱいかけて整理したいというご依頼であった。

5月下旬、奥様にもお越しいただき、3人で一度目の作業を行った。久々に入る先生の個研はまさに資料の宝庫だった。本棚の書籍や机の上の論文をお見せし、要る・要らないを一つずつ判断していただく。不要とされたものは段ボールの中へ。沖縄県史の高価そうな資料も民俗学関連のシリーズ本も、ひとまず段ボールへ収めた。先生は時折、テーブルにある英文資料をじっと読まれていた。奥様が笑いながら「じっくり読んでたら終わらないよ」と声をかけられると、名残惜しそうだった先生のお顔に思いがけず笑みがこぼれた。

和やかな雰囲気の中で、久々に先生とじっくりお話しもできた。とはいっても、ほとんど私の悩み相談だった。非常勤講師としての今の立場を心配していただいた。今年度から始まったゼミの運営に苦勞していると話す、「ゲストスピーカーが必要ならぜひ言ってください。紹介します。施設見学もいいかもね。あそこなんてどうかな？」と、惜しめないアドバイスをいただいた。そして次回の作業日を決め、私は個研を後にした。

二度目の作業を予定していたその日、先生がお見えになることはなかった。そして翌日、訃報に接した。

最後にお会いした日、先生は時折、息苦しそうだった。けれども、こんなにも早くお別れのときが来るなんて夢にも思わなかった。あの日、早々に休憩を切り上げ作業へ戻ろうとした私に、先生は、「そんなに急がなくていいですよ。(来年)3月まであるからね」と笑顔でおっしゃった。あのとときの言葉と表情が脳裏に焼き付いたままである。

ふと今年4月にいただいたメールを読み返した。そこには、今は美空ひばりなどの歌謡曲を研究していて、ものになるかわからないけれどグローバル化の受け止め方につなげたい、と記されていた。先生がかつて奄美「しまうた」の研究をされていたことを思い出した。限られた地域・集落で歌い継がれてきたうたが、グローバル化の進展によって他の文化といかに混ざり合い、いかなる偏在をなしていくのか。これが先生のテーマだったように思う。そこからさらに美空ひばりへ！驚きの展開に私は胸を躍らせた。と同時に、先生のアイデアの底知れなさを感じずにはいられなかった。

他にもたくさんの研究テーマやアイデアをお持ちだったのではないかと思う。さぞかしご無念のことだったに違いない。

道半ばにして旅立たれてしまった先生の思索を引き継ぐことは、決して容易なことではない。けれども、

先生の並々ならぬ研究への熱意と「人」への愛情を間近で学び取ることができたのは、私にとってかけがえのない経験であり、また財産でもある。

高嶋先生、お世話になりました。ありがとうございました。

あなたが育てられた若い芽を、どうか末永くお見守り下さい。

あなたの勤勉なお姿、そして純朴な笑顔を、いつまでも忘れません。